

## シンポジウム： “アジアの覚醒” と日本——アジア学理解のために

21世紀アジア学会シンポジウム

平成25年1月26・27日

### 2013年1月26日（土）

〈午後〉

13：00～13：05 挨拶 21世紀アジア学部長・梶原景昭：国士舘大学教授

13：05～13：10 プレゼンテーション：高橋伸子：国士舘大学教授（経営学）

基調講演「国学者・堀秀成一武士から知識人へ」

13：10～14：10 錦仁：新潟大学教授（国文学）

報告とパネルディスカッション 第Ⅰ部：近代日本の変貌

14：20～14：50 「西洋文化との出会いと暮らしの変容—開港場横浜と周辺地域を題材に」西川武臣：横浜開港資料館副館長（歴史学）

14：55～15：25 「山の近世と近代」山本智代：錦城学園高等学校教諭（歴史学）

15：30～16：00 「経営意識の変化—情報の秘匿から公開へ」高橋伸子

16：10～17：10 総合討論Ⅰ

総合司会：原田信男：国士舘大学教授（歴史学）

コメンテーター・表きよし：国士舘大学教授（国文学）

### 2013年1月27日（日）

報告とパネルディスカッション 第Ⅱ部：近代日本と東アジア

〈午前〉

11：00～11：05 プレゼンテーション 高橋伸子

11：05～11：35 「北海道アイヌの近代化と文明開化」百瀬響：北海道教育大学准教授（文化人類学）

11：40～12：10 「琉球処分と沖縄の民俗」宮平盛晃：沖縄国際大学非常勤講師（民俗学）

〈午後〉

13：00～13：30 「中国の近代化」小島末夫：国士舘大学教授（中国経済）

13：35～14：05 「朝鮮半島の日本語」河先俊子：国士舘大学准教授（言語教育）

14：10～14：40 「台湾原住民と日本—「旧慣」の近代化とその影響」山田仁史：東北大学文学部准教授（文化人類学）

14：50～15：50 総合討論Ⅱ

総合司会：原田信男

コメンテーター・福田円：国士舘大学准教授（東アジア国際政治史）

15：50～15：55 挨拶 21世紀アジア学会会長・三輪春樹：国士舘大学教授

## シンポジウム開催趣旨

私たち国士舘大学21世紀アジア学部は、2002年に鶴川の町田キャンパスに開設されました。すでに10年を過ぎたわけですが、これまで微力ながら教育・研究に邁進致して参りました。今回、21世紀アジア学部内に結成されている21世紀アジア学会として、「アジアの“覚醒”と日本」と題するシンポジウムを企画致しました。

本シンポジウムの意図は、アジアの近代とはどのようなものであったか、日本との関わりにおいて理解しようとするものであります。いうまでもなく近代とは西欧をモデルとしたもので、本来的なアジアの姿とは、本質的に異なるものです。そのアジアが、なにゆえ、どのように近代化を受け入れ、あるいは余儀なく強いられて、どのように今日の状況に至ったのかを、アジアのなかでもいち早く近代化を達成した日本との関わりで考えてみたいと思います。

すでに近代化論については、さまざまな角度から議論が尽くされており、過去の課題となってしまうようにも思われますが、果たしてそうでしょうか？ もちろん西欧的近代の破綻は、誰の目にも明らかですが、では世界はどのような方向へ今後進むのか、確固たるビジョンが示されているとは思われません。

そこで本シンポジウムでは、アジアといっても、日本との関わりを顕著にもった小地域に限られますが、そこで展開された近代化の過程を、より具体的に検討していきたいと考えております。つまり日本を中心として、アジアにおける近代化の問題を、人々の生活および活動のレベルで、制度やシステムといったハード面と、意識や認識といったソフト面における時代的变化に焦点を当てつつ、トータルな立場から見ていきたいと考えています。

このため第1日目は、まず基調講演として、近世に国学を学んだ武士が、どのように実学を身につけた知識人として変貌していったかを考えてみたいと思います。その上で、改めて日本内部に眼を向け、近代化の象徴ともいべき都市、なかでも最も先鋭的な変化を遂げた横浜の事例、そして対極であり、「貧しい」と見なされてきた山村の問題、さらには資本主義化の過程における経営意識の変化を検証し、近代化は民衆レベルにどのような変化をもたらしたか、を考えます。

そして第2日目には、近代に入る段階で、日本が改めて国家内部に組み入れた北海道と沖縄の問題を前半で考えます。基本的に北海道は、それまでアイヌ民族の地でしたが、これを日本国家の枠内に取り込んだことで、彼らの生活がどのように変化したのか、また薩摩に支配されたものの原則的には異国であった琉球王国の人々の生活を、どのように変えたのかを見てみます。そして後半では、近代日本が最も深い関係をもった中国・朝鮮・台湾を取り上げます。かつて文化を学んだ中国がどのように近代化したのか、朝鮮の近代化に日本がどのように関わったのか、台湾の少数民族にとっての近代化とは何であったか、こうした日本の周辺地域における変化の様相と要因について検討してみたいと思います。

今日、日本とアジアを取り巻く状況には、いろいろと厳しいものもございますが、日本はあくまでのアジアの一員として努力せざるを得ません。今回のシンポジウムが、そうした問題を考える一助となれば幸甚です。

(文責：原田信男)

## 〔基調講演〕国学者・堀秀成——武士から知識人へ

新潟大学 錦 仁

### 一. はじめに

NHKの大河ドラマ「八重の桜」を見ていますか。山本八重（1845～1932）の生涯ですね。会津城が官軍に攻められたとき、彼女は男たち交じってスペンサー銃をとって戦った。キリスト教に転じ、新島襄と結婚して、同志社大学を創立し、若者の教育に尽くした人ですね。裏千家の茶道を広めた人でもあります。

奮闘の人生、大きな功績を残した。誰もが知っている。でも、明治維新の陰には、別のタイプの人々がいます。懸命に生き、輝かしい業績をあげたが、報われること少なく、歴史の陰に消えて行った人。みんな忘れている。そういう人に目を向けようと思います。

堀秀成がそうです。幕末にイギリスからきた有名な外交官アーネスト・サトウに日本語の文法を教えた人。秀成は有名な学者でした。森鷗外は、文部省で行った講演で、本居宣長と堀秀成をあげて、二人の学説に耳を傾けるべきだと述べました。

例をあげましょう。私たちは「言う」と書きますね。しかし、高校で習った古文には「言ふ」と書いてありましたね。それじゃ「言ふ」が正しいのか、「言う」が正しいのか、それとも「ゆう」と書くのがいいのか。明治になると、こういう問題が出てきました。結局、「言う」になるわけですが、こういう問題で、堀秀成の学説が尊重されたのです。

国学者というのは、古事記、日本書紀、古今集、伊勢物語、源氏物語などを研究して、日本固有の物の感じ方、考え方、表現の仕方を明らかにし、それを尊んで、守り伝えようとする人のことです。賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤などが有名です。かれらには全国に弟子がおりまして、国学という学問の大きな流れをつくりました。しかし、明治になって次第に廃れてゆきました。堀秀成は、最後の国学者といわれています。

堀秀成の弟子は、生涯で二千人を超えます。自分の年譜にきちんと記録しています。影響力の大きい国学者、教育者であったといってよいでしょう。しかし、どんな生き方をしたのか、どこに行って、だれと付き合い、なにを考え、なにをしたか、どんな夢をもっていたか、ほとんど研究されていません。かれの書いたもので活字になったのは、ごくわずかです。だから、簡単に読めないのですね。けれども、三十歳から亡くなる六十八歳までの日記——十年分ほど自分で廃棄しましたが——残っています。古事記や古今集を初めとする古典についての著書、法律とくに刑法についての著書、旅先で講演するときの講義ノート、随筆などが多量に残っています。墨で書いた膨大な資料ですね。これが全国各地の博物館や図書館に、誰の目にもふれることなく、眠っています。私は、この十数年、秀成の歩いた土地をめぐり、自筆原稿を写真に撮って、読んで、分析するという仕事をしてきました。今日はそのお話です。

## 二. 生い立ち

お手元の資料6「略歴」をご覧ください。秀成は文政二年（1819）、古河藩（茨城県古河市）の江戸藩邸で生まれました。ところが生後九ヶ月のとき、母が十八歳で亡くなった。すぐ継母がきたのですが、なんと亡き母の妹でした。弟が生まれ、妹が生まれます。そして秀成が十九歳のとき、父が三十七歳の若さで亡くなった。長男ですから家を嗣いではいたけれど、三つ歳下の弟がいるから、立場は悪い。父もいない、母もいない家にいられますか。継母は秀成につらくあたった。

みなさんだったら、どうしますか。家を出て、アルバイトしながら、専門学校か大学に通う。卒業して会社に入る。今なら、そう考えますね。でも、このころ大学はなかった、会社という働く場もなかった。最初の大学、東京大学ができたのが明治十年（1877）、秀成が五十八歳のときです。早稲田大学は明治十五年です。みなさん、どうしますか。

秀成には、誇りがありました。古河藩主・土井利位の「近習」であったことです。十一歳のときから藩主のお側に仕え、脱藩する二十三歳まで続いた。家は百五十石ですから豊かではないけれども、近習に選ばれる家柄で、秀成はそれだけ優秀で、武芸もできた。

秀成は、故郷を捨てます。脱藩です。藩主の諒解をとり、家を捨てた。堀家の跡継ぎを弟に譲って江戸に行った。湯島の昌平坂学問所に通って一年ほど勉強し、それから三重県の桑名に行って、富樫廣蔭という国学者に習った。それから、新しい先生を求めて三重、愛知、岐阜あたりをさまよった。その合間に、勉強したい人を見つけて、泊めてもらって国学を教える。それでは食えないので、得意の講談を披露して、わずかなお金を稼いだ。講談は、楠木正成とか赤穂浪士などの武勇伝を、独特の節をつけて語る演芸ですね。これをしたあと、秀成はひどく落ち込む。卑しい技芸をして腹を満たさねばならぬ。ああ、武士の誇りが傷つく、と。

## 三. 旅する国学者になる

秀成は、旅する国学者になったのです。旅芸人のような浪人学者ですね。故郷にいられない。生きるため、食うための生活を続けてゆく。十日ほどで講義が終わると、別の村に行く。蔵書家に泊めてもらって本を見せてもらう、国学者がいれば行って教えを乞う。読むもの、食うもの、着るもの、おおかた恵んでもらうわけです。

こういう旅をするとき、なにが大事か、わかりますか。資料5「旅のいましめ」を見てください。嘉永二年、三十歳の日記の終わりに、「五つのいましめ」を書きつけています。これを守って旅をしたのです。最初に「いかり」とあります。怒らないこと、ムツとしないこと。そうですね、他人様の親切をもらいながら旅をするのですから、不平不満があっても、なんでもありがたい、と受けとめて、じっと我慢する。性格まで、そんなふうになっていくでしょうね。

こういう生活を七年ほどして三十歳になった。学問が進んで一人前になり、各地に弟子ができる。そうすると、一つの地域に定住して、周辺の村々をめぐる、弟子たちに教えるようになります。秀成を先生とする集団ができあがる。相模や甲府盆地の神官たち、八王子の千人組に迎えられて国学を教えたのは、堀秀成です。その結果、水戸藩主・徳川斉昭の目にとまり、安政四年（1857）、

三十九歳のとき、「醜能御楯」という本を書いて献上します。尊皇攘夷、外国からやってくる西洋諸国を排撃すべし、という過激な本です。秀成は明治維新になるまで、こうした生活を続けました。

ここからは簡単にお話します。明治三年（1870）、秀成は「宣教使」に抜擢されました。明治政府に設けられた役所です。そこに勤める人も「宣教使」とよばれました。明治政府の目標は、西洋諸国に負けない国を創ることでした。そのために国民を教育する。全国各地に「教院」をつくって、地元の人々を集めて教育をした。国を挙げての取り組み、大教宣布運動といいます。秀成の仕事は、教院で教える人を選ぶこと、かれらに見本の講義をして見せること。今でいえば、文部省お抱えの教授、偉い人になったわけですね。

その頃の同僚に、のちに福島・山形県知事になった三島通庸、国の神道政策を決定した福羽美静などがいます。秀成は明治十五年の「秋田日記」に、二人とも親友であったが、いつまにか差が付いた、かれらは雲の上人、自分だけが落ちぶれて、教養もない田舎人相手に地方巡業の講演をして歩いている、と嘆いています。

秀成が最も耀いたのは、政府の中の「宣教使」となって活躍し、函館に行つて明治の精神を教え、東京に戻つてきて学習院の教示となった、約8年間です。函館は、長崎と同じくキリスト教の信者が急激に増えたところです。西洋諸国と肩を並べるには、政府は信仰の自由を認めなければならない。しかし、キリスト教の信者が増えて、神道が廃れては国家は創れない。神道国家を目指していたのです。そこで秀成に白羽の矢があたった。これがうまくいきます。五百人、多いときは千人、ときには二千人も集まって、秀成の演説を聴いた。マイクはまだなかった。しかし、後ろまでシーンとして聴いたと秀成は「函館日記」に書いています。

秀成は、若い頃、お金ほしさに講談をしていました。それが生きたのです。声は張りがあつて、高く、大きく、遠くまで響いた。話の組み立てが実にうまかった。檀上にあがると、大きな声で、朗々と古今集などの和歌を唱える。これで惹きつけておいて、古典の話や歴史的な事件をもち出して来る。それを例え話にして巧みに語ってゆく。新しい時代の生き方を教える。明治時代の演説法を定めたのは堀秀成です。演説法の本も書いています。

東京に戻つて数年後、明治十年の五月、学習院の教授になります。そして、明治天皇の母上にも、古典の言葉・文法について講義をしました。絶頂期ですね。このころの教え子がイギリス人のアーネスト・サトウです。ドイツ人のコルシェルトという人にも教えた。東大にやってきた外国人にも教えています。

名声はあがつてゆくのですが、長く続きません。半年ほど学習院に勤めて辞職。そして、伊勢神宮の大教院、今の皇學館大學に行きました。ここには、弟子が勤めておりまして、先生が学習院を辞職したのを見て、呼び寄せたのです。辞職は、たぶん二月に勃発した西南戦争が影響したのでしょう。戦争終結後、政府は方針をガラリと変える。さまざまな制度・組織が変更された。その煽りであろうと思います。

神宮教院では、全国から秀才を集めて国学を教えました。地元の人々にも教えました。ところ



が、二年半もしないのに、香川県の金刀比羅宮へ隠居してしまいます。人員整理があつて、引っかかった。居残つてもよかったけれども、辞めた。ほんとうの原因は、同僚との対立です。自分の主張を「大教本論」という本にして、管長にぶっつけて、去つたというわけです。

一説に、机の上にキリスト教の聖書が置いてあるのが見つかつて、辞職を迫られたというのですが、これは間違いです。神宮教院では、キリスト教の聖書も教えていました。カリキュラムが残っていますから明らかです。反面教師にしたのでしょうか。当時の国学、神道は、必ずしも視野が狭かったわけでない。あらゆるものを見て、調べて、それらとくらべてもなお日本の伝統的な制度、文化が優れている、と考えましたから。

こうして見てきますと、旅から旅への人生ですね。資料2の地図をご覧ください。三十歳で国学者として自立し、東海から関東へ、そして東北へ。東京にきてからは函館へ、それから伊勢にやってきて、資料1に示したように、遠方への旅をいくつも行った。資料4にあげましたが、九つの旅日記が遺っています。晩年は、琴平に住んで二ヶ月も経たないのに、松江に行き、その足で秋田へ向かっています。

どの旅も、民衆に新しい時代の生き方を説いて歩く、国民教育、大教宣布の旅です。立身出世の競争に破れ、重要なポストに就けなかった。都を離れて地方を歩き、説教・講演をして歩く。空しかったでしょうね。旅日記に憤りを吐き散らし、負け犬のような孤独を深め、無用者意識に沈んでいく。そういう中で秀成の思想は熟していくのです。

秀成は、旅の合間に、法律書をたくさん読みました。その一つを資料8にあげました。東京や京都に立ち寄ったとき、こうした法律に関する翻訳書をたくさん買い込み、メモをとりながら旅をしています。外国の思想・歴史も学んで、新しい国家のありかた、日本はどうあればよいか、たくさん本を書きました。伊勢にきてから、ますます研究熱心になります。琴平・高松では、警察署長に頼まれて署員たちに刑法の講義をしています。かれらこそ、刑法はなぜ必要か、なぜ国民に守らせなければならないか、を知る必要がありました。国学者から法学者へ、少しずつ変化していきます。

当時、外国の法律を研究した学者は多かった。明治になって翻訳書がたくさん出版された。しかし、地方を歩いて、民衆に法律・刑法の必要性をわかりやすく説いた人は、秀成のほかにはいないと思います。宣教使になってから没するまで実に十七年間も、この仕事に命を捧げています。

#### 四. 天皇にも信仰の自由がある

さて、秀成は、民衆にどんなことを説いたのか。最も注目すべき二つをとりだしてお話します。一つは、天皇にも信仰の自由がある、と説いたことです。びっくりしませんか。こんなことをいえば、今でも問題になりそうな気がします。だれに語ったか。香川県の神官たち、そして、秋田県の小さな村の人々です。別のところでも語ったと思われます。資料10をご覧ください。

明治十五年の「秋田日記」十月二十三日に、こう書いてあります。「午後四時より例の講壇に臨みて、信仰上は政府の権外なるを以て自由なりといへども、天皇みづからは敬神を主となし給ふよ

しを、つまびらかにさとしぬれば、きく人皆感じあへり」。天皇がどんな宗教を信仰するかは、政府の権力外のことだから、政府は関知しない。天皇の自由である。しかし、天皇は古来、神を尊び敬ってきたから、かならず神道を選ぶ。よって、日本の国体は変わらない。永遠に不変である。

これはどういうことか。信仰の自由は、文明諸国の常識です。信仰の自由がない国は、文明国ではない。日本は文明国だ。国民はキリスト教を信じてもよいし、仏教を信じてよい。西洋と同じく、だれでも「信仰の自由」の権利をもつ。天皇・皇室も例外ではない。だが、天皇はかならず神道を選ぶ。よって国体は変わらない。こういう自信ですね。

いや、それには条件があります。国民はそういう天皇・皇室を信頼する。天皇・皇族を模範として仰ぐ。そうすれば、天皇も国民も異教に傾かず、神代以来の国体はびくともしない、というわけです。

明治五年に政府は国民に「三条の教則」を布達しました。神を尊び国を愛する、人としての道を守る、皇室を尊敬する、の三つです。この三つの教えをふまえて、「天皇にも信仰の自由あり」と述べたのです。

秀成の考えを高いところから見渡すと、天皇を頂点とする君主制国家を建設したいということですが、その根底は、日本型民主主義を説いている。天皇も国民と同じ権利を有するという意味の、君主制民主主義国家をめざしたのです。天皇が頂点にいて、政府が国民を支配する封建的国家をめざしたわけではありません。

天皇に信仰の自由ありの講演した佐藤さんの家は、今もあります。すっかり改築されたのですが、裏庭は秀成の見た面影をわずかに残しています。私は、二度ほど行って、地元の人々の協力をえて、やっと探しました。ここは野石という小さな集落です。聴いたのは数十人でしょう。ごく普通の人々、農民と漁民です。ていねいに説明したところ、「きく人皆感じあへり」とありますが、本当に理解したのでしょうか。

次に、資料11と13をご覧ください。13が原文の講義ノートです。11は活字に直したものです。同じ話は、五ヶ月ほど前の明治十五年六月、香川県の新宮比羅宮の本部でも行ったことがわかります。聴いたのは、神官たちです。教養の高い人々ですね。

秀成は、13の大型の講義ノート「拾四」をもって秋田にやってきました。見ながら講義したのです。『講録拾四』は、秋田にきてから書きました。大切なところは、活字を替えて翻刻してみました。

「信仰（の）自由、法律に害なきは、之を令する権、政府になし」とありますね。法律を犯さなければ、だれにも信仰の自由はある。政府に制限する権限はない、とはっきり述べています。そのあとが、例え話です。西洋のある国の王様はこう語った。政府の権限に関係のないことに政府は口出ししない。反対に、政府の権限に関係のあることは、国民にすべてを見せて、その中から国民がよいと思うものを選んでもらう、と述べています。民主主義の思想ですね。

そう述べて、さらに具体的な例え話を出してきます。「呉服屋」は、今のユニクロみたいなものです。なにを買うかは、お客の自由だ。お客は、好きな服を選ぶ。売る側は、つまりお店は品揃え

をして、お客に選んでもらう、と述べています。お客が国民、お店が政府ですね。こういうのが、国民と政府の関係なのだ、というわけです。お客は「人品に応じて」、つまり職業や収入に応じて、また季節や年齢に応じて、必要なものを選んで買う、と述べています。

さらに例え話を進めていきますね。「時勢に変遷ある」、つまり時代は変わるものだ。時代の流れに逆らうことはできない、という例え話し進んでいきます。寒さ・暑さは変えられない。帆を張った船で谷川はのぼれない。手で洪水は防げない。茶碗の水で火事は消せない。それと同じように、世界の趨勢、時代の流れに逆らえない。時代は進歩するから、時代の動きに逆らうような政策はできないんだ、というのですね。

というわけで、西洋諸国と肩を並べた我が国では、「信仰の自由」はだれにでもある、天皇にもある、という結論になります。ただし、「天皇は民に示さずして、神道を取り給ふ」。国民におのれの心を語らないし示さないけれども、おのずと神道を選ぶ。お客が好みの品を選ぶように、天皇みずから好んで神道を選ぶのである、というのです。

さらに、付け加えていますね。「祭政一致となる。其末は文明を取る」。祭政一致は日本古来の政治をいいますが、その行く末は、時代の流れに沿って西洋の文明を尊重し採り入れ、政治に活かしてゆくようになる、というわけです。

どうでしょうか。私たちは、国学者というと国民を戦争に導いた連中だ、と単純に思ってしまうことはないでしょうか。堀秀成が歴史の陰に葬られたのは、そういう考え方が強く影響したように思います。批判は必要ですが、堀秀成をよく見つめて、正しく認識すべきです。

次に、資料14「政党五大変遷図」を見ましょう。14に原文を、15に翻刻を、16に要約を示しました。原文は、一枚ものです。縦65センチ、横32センチ。これを壁に貼って説明したのでしょう。明治十六年五月十三日と記してありますから、香川県高松市の警察官たちか市民に語った資料と思われます。

要約の16を見てください。日本の政党、つまり政治がどう進んでいくかを示しています。第一段階は、政治と宗教が分離していない時期です。明治初期の祭政一致の段階をさしているのでしょう。第二期は、政治と宗教が分離したけれど、交通が不便なので、中央の政治、政府の政策が地方へ伝わらない段階。おそらく、秀成の生きている明治十年代後半をさすのでしょう。第三期は、交通が便利になって中央の政治、政府の政策が地方に及んで、効果をあげる。けれども、軍人たち、高学歴の人たち、貴族階級や財産家たちが、それぞれ政党を結成して国民を支配する。そんな時代がくるというのですね。

次の第四期からが大事です。秀成の国家観、政治思想がはっきりと出ています。憲法の制定、国会の開設を求めて、政党どうしがエゴイズムを克服して〈公事〉を優先する時代がくる。自分たちの私的な利益の追求を止めて、国民と国家がの共有する、公的な利益を優先する時代がくる。第五期では、憲法に則って政党どうしが議論して政策を決め、実施・実行する時代にくる。最終的に、与党と野党の二大政党になり、互いに競いあって政権を担当する時代がくる、と考えているのですね。



末尾に、欧米の学者の説を引いていますから、スペンサーかだれかの説なのでしょう。だから、秀成の独創とはいえないけれども、日本の現状をよくよく見つめて分析し考察し、国家とはなにか、どのように進んでいくべきか、を明確に描き示している。これは注目すべきです。日本はまだその段階ではないが、〈私事〉を克服して〈公事〉を確立して行かねばならない。国家、政治というのは、政党のエゴイズムでやっちゃいけない。社会理念を確立すること、国民がそれを共有して、国民のための国家・社会を築いてゆかねばならない。こう考えて、未来の私たちに託しているのですね。

どうでしょうか。明治十六年五月の秀成の日本論を見てきました。第四期から第五期へ、それは未来の日本を希望をもって予測しているのですが、かなり進歩的な未来論になっていると思います。注意すべきは、ここに天皇が出てこないことです。前の年の明治十五年六月の琴平、十月の秋田における講演と比較すると、変化してきたな、と思わされます。

秋田で書いた講義ノートには、天皇は信仰の自由をもち、自分の好み、思想として神道を選びとる、とありました。そして、今は神道を主体とする天皇による祭政一致の宗教国家の時代である。しかし、時代は変化してゆく。時流には逆らうことはできない。日本は西洋の文明を採り入れて、新しい国になっていく、西洋と肩を並べる民主主義の国家になっていく。そう考えていた節があります。そう考えを進めた結果、「五大政党変遷図」が生まれたわけでしょう。

証拠をあげませんが、秀成の結論は、資料の17のようになります。法律とは、国家と国民が交わす契約である。法律を共有することによって、それにもとづいて国家は国民を、国民は国家を尊重する。国家は国民の権利を守り、国民を養う。国民は国家を支え、高める。神道は、そのための国民の精神であり、倫理である。

かなり斬新な考え方ではありませんか。でも、神道は宗教ではないのか、仏教やキリスト教と同じく宗教ではないのか、と疑問をもつ方がおられるでしょう。簡単に解説して、終えることにしましょう。

秀成は、神道は宗教ではない、と考えました。仏教は、人は死ぬ、命ははかない、と教えます。無常観ですね。死ねば地獄に墜ちる。浄土を信じて祈れ、と教えます。キリスト教も地獄と天国を教えます。ともに、死から生を見ようとしますね。また、人間には原罪があると教えます。

秀成は、こうした考え方をしないのですね。地獄はない、という。人間は、力の限り誠実に生きて、よき人生、よき社会を創る力をもっている、と考えるのです。したがって、神道の一派の唱える、人は死ぬと死の国に行く、という考え方を否定します。イザナミは、ちょっとした過失によって一時的に黄泉の国に行ったのであって、仏教やキリスト教のような死の国はない、というのです。

実は、伊勢神宮で同僚と対立したのは、黄泉の国はある、ない、という対立でした。秀成は、あるという人たちを、神道ではなく、宗教を説いている、と非難したのです。それでは、神道を土台にした日本国家を建設することはできない、と。神道は、国家を支える国民の倫理・思想である、というのですね。

こうした神道国家観が少しずつ変化を見せてゆくところに、明治十五年の秋田への旅があった。東北の民衆に新しい国家像を説いて歩く体験を通して、少しずつ秀成の思想がととのってきたのでしょね。明治政府内の出世街道、学習院の教授、伊勢神宮の史観ポストから落ちこぼれ、金刀比羅宮からも離れて、高松における晩年の生活の中で、それは形をはっきりとあらわした。

秀成の人生は、故郷、古河藩、家、そして、尊皇攘夷の国づくりの夢、新しい明治の国家・制度、皇室の人の通う学校、明治国家を支える神社、すなわち自分の関係したすべてのものからドロップアウトしてゆく人生でありました。

しかし、それゆえに孤独であり、それゆえに自由であり、それゆえにおのれの思想を形づくった。〈武士〉であった秀成は、なにものにも所属しない、その地点において、おのれの思想を語り、書く〈知識人〉となった。そして、明治二十年（1887）十月三日、高松の病院で六十八歳の生を終えました。

最後に、明治二十七年（1894）の日清戦争、明治三十七年（1904）の日露戦争を見なかったことは、堀秀成にとって、幸せなことだったかもしれません。この二つの戦争の勝利を、秀成はおのれの理想とする民主主義国家の希望の夜明け、と見たかどうか。

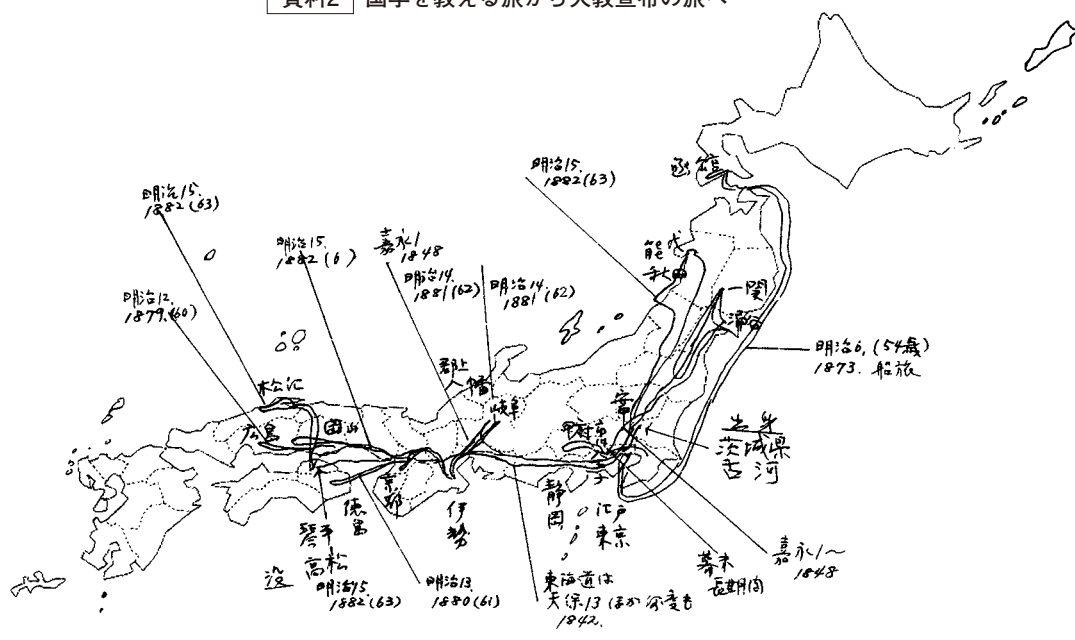
この辺で閉じたいと思います。

※資料の出典については、筆者の責任において掲載した。



資料1 唯一の写真。61歳  
『古河史蹟写真帖』（昭和十年版）より転載

資料2 国学を教える旅から大教宣布の旅へ



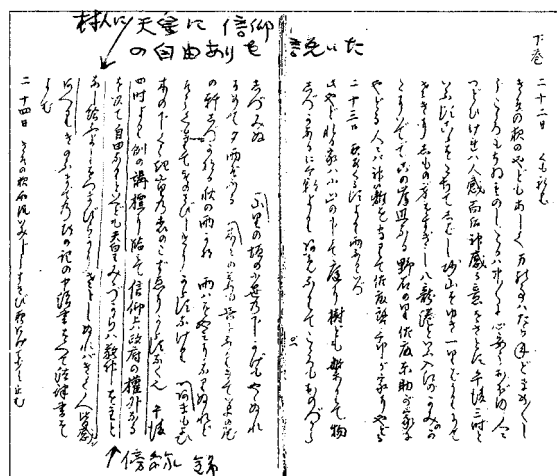
資料4 日記 30年分の日記が残っている。

堀秀成の自筆資料がだれの目にも触れず各地に眠っている。  
(旅日記・勤務日誌・講演ノート・国学書・刑法書・随筆)

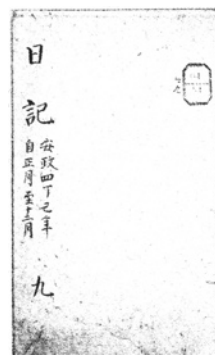
旅日記

- 1「函館日記」明治6 (1873) 4/18 ~ 7年 4/1 赤坂・函館 54 歳
- 2「甲斐日記」明治7 (1874) 11/7 ~ 12/25 赤坂・山梨 55 歳
- 3「広島日記」明治12 (1879) 5/25 ~ 6/3 伊勢・広島 60 歳
- 4「徳島日記」明治13 (1880) 5/9 ~ 6/28 伊勢・徳島 61 歳
- 5「岐阜日記」明治13 (1880) 8/6 ~ 8/10 伊勢・岐阜 61 歳
- 6「都日記」明治14 (1881) 4/16 ~ 5/11 伊勢・京都 62 歳
- 7「美濃日記」明治14 (1881) 8/6 ~ 9/2 伊勢・岐阜 62 歳
- 8「吉備日記」明治15 (1882) 2/24 ~ 5/28 伊勢・岡山 63 歳
- 9「秋田日記」明治15 (1882) 7/10 ~ 12/3 琴平・秋田 63 歳
- (10「梅の木陰」慶応2年 (1866) 47 歳 未発見。他にも有り)

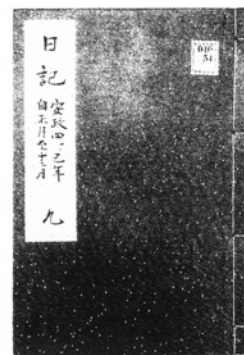
資料3 秋田日記



「秋田日記」下巻。明治15年10月22~24日。宿舎にあてられた佐藤家の裏庭は当時の面影を残す。学習院大学図書館蔵。



堀秀成の「日記」。原装。学習院大学図書館蔵。



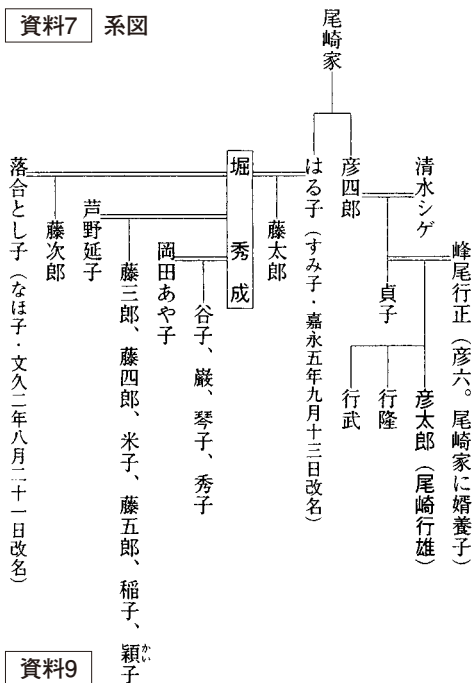
堀秀成の「日記」。後装。学習院大学図書館蔵。

## 資料5

旅路 五つのいましめ  
 いかり うかれめ。ことなるくひもの  
 さまをかざる たからをほりする  
 同じく たづねもとむべきの五つ  
 山水の詠め 国々名所ふりし跡  
 国々の俗（よ）とおのれにまさる人  
 式内の社（みさ、ぎは、もとをもをがむべし）

旅のいましめ  
 嘉永二年（1849）  
 「日記」巻末  
 30歳

## 資料7 系図



## 資料9

- 最初の妻は、憲政の父・尾崎行雄の大叔母すみ子。行雄はもと彦太郎佳行。父の依頼で秀成が付けた。父も母も秀成の弟子。
- 二番目の妻は、落合直亮・直澄の妹とし子。いずれも弟子。直亮は浪士隊の副隊長。
- 三番目の妻は、芦野楠山（篆刻家）の姉延子。
- 四番目の妻は、岡田あや子。弟子。

## 資料6 略歴

## 誕生～遍歴時代（国学者となり旅をする）

- 文政2年（1819）12月6日 江戸・大名小路の古河藩邸で生まれる。0歳。
- 3年（1820）8月4日 母死亡。18歳。秀成、生後9ヶ月。
- 5年（1822）異腹の弟、文政8年異腹の妹生まれる。3歳。
- 天保1年（1830）「二月ヨリ君侯ノ近習ニ奉仕ス」。11歳。
- 9年（1838）9月4日 父重遠没。37歳。
- 10年（1839）「古河城ニ移ル」。20歳。
- 12年（1840）「四月致任。弟重清、家ヲ襲フ」。22歳。
- 13年（1842）「皇典学（国学）ニ志シテ三月、古河城ヲ退ク」。23歳。
- 安政4年（1857）38歳。徳川齊昭に「醜能御盾」を献上。
- 明治2年（1869）下野国（栃木県）皇学校教示。建言書を待詔局を出す。50歳。

## 仕官時代（布教活動1）

- 明治3年（1870）3月、太政官の宣教大講義生。51歳。
- 6年（1873）3月、大教院講師長。函館出張。54歳。
- 9年（1876）太政官より権少教生。57歳。
- 10年（1877）5月、学習院語学教示。10月、学習院を辞す。58歳。

## 伊勢神宮時代（布教活動2）

- 明治11年（1878）6月、講師長を辞す。12月、伊勢神宮の教院に赴任。59歳。
- 14年（1881）6月、「大教本論」を伊勢神宮管長・田中頼庸に提出。

## 讃岐時（布教活動3）

- 明治15年（1882）5月、伊勢神宮を辞す。6月、讃岐国（香川県）金刀比羅宮に赴任。
- 7月、因幡（鳥取県）・出雲（島根県）を経て秋田に行く。63歳。
- 19年（1886）10月、金刀比羅宮を辞す。高松に移転。67歳。
- 20年（1887）10月3日、永眠。68歳。

## 資料8 秀成が読んだ法律書の一つ

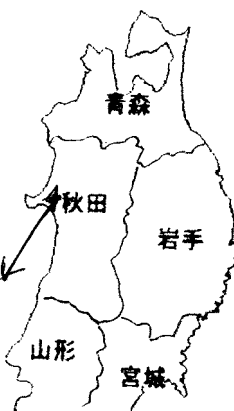


宮城浩蔵『日本刑法論 七』（明治14年2月）。執筆順に7分冊で刊行されたが、最後に合冊本が出た。著者はもと山形・天童藩士。新潟大学附属図書館蔵。

資料10 秋田日記 明治十五年十月二十三日



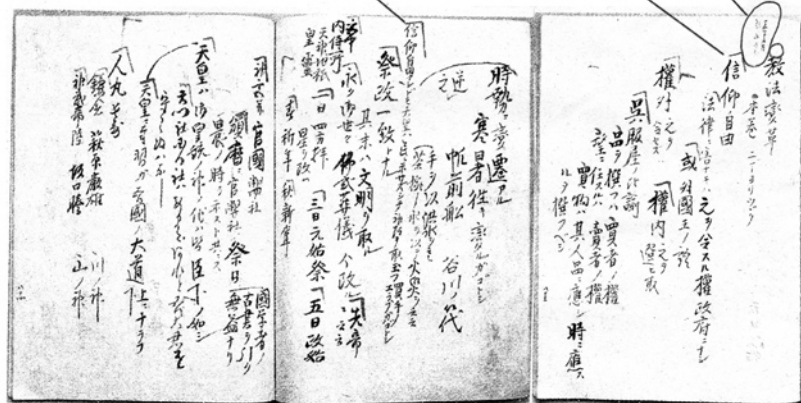
資料12 野石集落。八郎潟のそば



午後四時より例の講壇に臨みて、信仰上は政府の権外なるを以て自由なりといへども、天皇みづからは敬神を主となし給ふよしを、つまびらかにさとしぬれば、きく人皆感じあへり。

資料11

○教法変革（頭書 十五年六月 琴平本部）  
 ○本巻 ニ丁ヨリツバク。  
 信仰自由・法律ニ寄ナキハ之ヲ今スル様、政府ニナシ。  
 或外國王ノ語（ル）、  
 権外、之ヲ令セズ。権内、之ヲ選ビ取（ル）。  
 異服屋ノ比論  
 望ニ任スルハ 賣者ノ權、  
 買物ハ其人品ニ応ジ、  
 時ニ応ズルヲ撰ブベシ。  
 時勢ニ變遷アル。  
 寒暑、往キ変ルガゴトシ。  
 逆之（これに逆あうは）、  
 帆船船 谷川ノ筏、  
 手ヲ以（テ）洪水ヲ云々、  
 茶碗ノ水ヲ以テ火災ヲ云々。  
 信仰（ハ）自由ナレドモ、天皇ハ民ニ示サズシテ、  
 神道ヲ取（リ）至フ、買手ノエラフガゴトシ。  
 祭政一致トナル。其末ハ文明ヲ取ル。



資料13 「講録拾四」 古河歴史博物館蔵





## 〔報告1〕西洋文化との出会いと暮らしの変容 —開港場横浜と周辺地域を題材に—

横浜港資料館副館長 西 川 武 臣

概要：1859（安政6）年7月1日、横浜は、前年に結ばれた通商条約にもとづき、箱館・長崎とともにアメリカ・イギリス・フランス・ロシア・オランダに対して開港した。その後、日本と人々の暮らしは急激に近代化したが、報告では幕府の貿易や近代化に対する政策の推移、開港後の人々の暮らしと意識の変容の実態などを明らかにしたい。

### 1、幕府の国際化への対応と国際都市横浜建設の過程

アメリカなどと結んだ通商条約では、西洋人が定められた場所（開港場）以外で永住することと商売することを禁止されていた。これにより日本人と外国人の交流は開港場に限定されることになった。また、外国人の商業行為が開港場に限定されたことによって、外国資本が国内に流入することが制限され、これが日本の経済的な自立を守ることになった。しかし、こうした状況は、幕府が日本の近代化や国際化に消極的であったことを意味しない。そもそも、保守的であったとされる井伊政権のもとでも、幕府は積極的に貿易振興をはかるとともに、国際都市横浜の建設を推進した。また、国内から攘夷派勢力が衰退した1866年以降になると、そうした傾向は一層強まった。

### 2、横浜開港に際しての人々の動向

幕府が、横浜での貿易開始を公布した1859（安政6）年初頭以降、首都圏や開港場周辺地域から横浜への移住が相次いだ。その後、人々は横浜で西洋人との交流を繰り返した。そもそもペリー艦隊来航以来、この地域の人々は西洋の文物に対する「開放性」を示していたが、開港後、そうした傾向が一層強まった。その背景には、1840年代から西洋に関する正しい情報が村役人クラスにまで伝えられていたこと、ペリー艦隊来航に際して西洋の文物に親しく接していたことがあったと考えられる。西洋の文物に対する人々の「開放性」については多くの事象をあげることができるが、開港直後から人々の暮らしに西洋の文物（食品・日用雑貨・乗り物など）が入ってきたことは間違いない。また、開港場が商業都市として発展するのにともない、多くの職人・小商人・肉体労働者が開港場に移住し、横浜の経済を根底から支えたと同時に、彼らの暮らしの西洋化・近代化が進められた。

### 3、国際化の中での意識の変容

幕末から明治初年の地域に残された庶民の日記や手紙には西洋の文物を「開化」の象徴として礼賛する記述に出会うことがある。しかし、これは、人々が無批判・無条件に西洋化を受け入れたことを意味しない。たとえば、当時、出版された中国人を紹介した浮世絵には、中国人を「文物礼楽、中華」の国の人として敬う記述がある。また、西洋人のことを「夷狄」として蔑視することも広く見られた。そのように考えてみると、この時代の人々は意識するしないにかかわらず、「開化」と「夷狄」をめぐる、日本人がどのように近代化していくのかを選択すべき分岐点にいたと言えるであろう。

### 【参考文献】

西川武臣・伊藤泉美共著『開国日本と横浜中華街』大修館書店、2002年・西川武臣著『幕末明治の国際市場と日本』雄山閣、1997年・西川武臣著『横浜開港と交通の近代化』日本経済評論社、2004年

## 〔報告2〕山村の近世と近代

錦城学園高等学校 山 本 智 代

### 「貧しい山村」像

一般に「山村」には「遅れた」「貧しい」「閉ざされた」等のイメージがつきまとっている。その大きな原因のひとつは、山村も漁村も「稲作」を中心に一律「農村」として捉えられてきたことにある。特に近世社会においては、水田稲作による米の見積もり生産量を石高として、村の規模を比較・評価してきた。このため傾斜地が多く耕地となり得る土地の少ない山村は、相対的に石高が低くなることから、経済的に「貧しい」地域と認識されてきたのである。しかし実際には、近世の山村は、非常に多くの家数・人数を保持しており、それに見合う生業があったことを忘れてはならない。

### 近世の山村

多くの山村は、水田となり得る土地が少なく、全く水田のない村も存在した。水田を持つ村でも谷戸を利用した小規模な水田しかないことが多かったが、水田のほかにもさまざまな食料取得の手段があった。屋敷地周辺の畑で食料生産を行うほか、かつての山村では傾斜地を利用して多くの焼畑が営まれ、粟・稗・大豆などを栽培して食料をまかなっていた。また山菜やきのこ、木の実などを採集し、狩猟や川漁を行って豊かな山の恵みを得てきたのである。さらに、山には現金収入を得るための林産物が豊富に存在したことから、山村の人々の生活は、近世初期から商品経済に関わっていた。人々は材木や薪炭、木工品、繭や織物、獣皮、鉱物等の商品を生産したり、出稼ぎや商売をしたりすることで現金収入を得て、米や塩、薬などを購入していた。これまで単に自給食料生産の場と考えられていた焼畑においても、材木生産のほか、和紙の原料である楮、養蚕のための桑、独自の味わいを有する赤カブ、さらには古くから自生する山茶など、実にさまざまな商品作物の生産が行われていたことが指摘されている。こうした現金収入を得る生活は、時に大きな財を生み出すこともあり、山村の人々のなかには、材木商売や養蚕等によって大経営者となるものもあった。近世の山村に暮らした人々は、林産物を加工するなどの高度な技術・技能と、山の資源を徹底的に利用するための豊かな知恵を有していたのである。

### 近代の山村

こうして山村は、近世の早い段階から商品経済と関わっていたために、資本主義的な近代化への対応は、農村や漁村よりも早かったと考えられる。開国以来輸出品の大多数を占めたものには山村の製品が多く、生糸の生産や山茶による紅茶製造など、商品価値の高いものを積極的に生産していた。さらには近代的技術の採用は新たな需要を生んだほか、鉄道などの交通手段の整備によって、山村における製炭や製糸、製材の生産量が増加するなど、新しい経済構造に柔軟に適応できた部分も少なくなかった。明治後期から大正期にかけて、材木や炭、あるいは繭の生産量がピークを迎えた地域などもあり、近代化が山村に有利に働いたことが窺われる。

昭和30年代後半以降、工業化の著しい進展と高度経済成長の中で山林資源の経済的な価値が下落し、各地の山村は急速に活力を失うところとなったが、近代化の過程で山村の果たした役割には、想像以上に重要なものがあったといえよう。

## 〔報告3〕経営意識の変化 ——情報の秘匿から公開へ

国士舘大学21世紀アジア学部 高 橋 伸 子

### 最初の株式会社組織，国立銀行

1872（明治5）年に発布された「国立銀行条例」に基づいて設立された国立銀行\*は，わが国最初の株式会社組織であり，近代的発券銀行である。ここでは，この国立銀行に焦点を充て，営利組織，つまり利益をあげることを目的とした組織の経営で何が変わったのかをテーマとする。国立銀行の設立にみられる経営意識の変化を促す要素は，株式会社組織の採用と，近代会計制度の導入の2点があげられる。

### 株式会社組織の採用

まず株式会社組織の採用についてみていきたい。「国立銀行条例」による最初の設立は，第一国立銀行である。主な出資者は江戸時代の豪商，三井家と小野家で，初代総監役は“日本資本主義の父”と言われる渋沢栄一であった。江戸時代には独立した商家として経営していた三井家と小野家は，共同出資した銀行の共同経営に協力的ではなく，渋沢栄一は明治7年に紙幣頭に提出した建議の中で，その困難な状況を明らかにしている。共同出資を快く思っていなかった三井家は第一国立銀行を見限って，明治6年には日本で初の私立銀行を独自で設立している。第一国立銀行以外にも，第二国立銀行，第四国立銀行，第五国立銀行の3行が明治5年の条例により設立されている。第三国立銀行は，鴻池家等，同じく江戸時代からの豪商により大阪で設立されようとし，政府から認可を受けていた。しかし，株主間の対立により開業に至らず，当初は欠番となっていたのである。

国立銀行の設立にあたっては，それまでに十分な資本を蓄積していた豪商が主に出資したのであるが，それまでの同族経営の意識を大きく変えせざるを得なかった。

### 近代会計制度の導入

近代会計制度の導入については，会計技術の導入もさることながら，開示規定はより大きく影響したと考えられる。それを規定した「国立銀行条例」が制定された背景には，紙幣の問題の解決と近代的金融機関の必要性という二つの課題があった。

国立銀行の目的の一つは，明治政府が財政難を補うために発行した不換紙幣である太政官札の償却であった。政府と紙幣への不信認から，額面価格で流通していなかった太政官札を国立銀行の責任で発行する紙幣に代替させようとしたのだが，江戸時代には全国的に流通していなかった紙幣に対する信認の獲得が大前提であった。一方，江戸時代の両替商はもともと自己資金に基づいて活動する金融業者であり，殖産興業のためには，資金を預金として集中し活用する近代的金融機関が必要であった。預金を主要な資金源とする銀行は，自己資金による両替商よりも低金利で融資ができる。しかし，人々の預金を促すためには銀行という新しい機関への信認の獲得が必須であった。

この二つの信認獲得の課題を解決するための方策の一つとして，政府は企業の会計情報を公開させたのである。「国立銀行条例」には会計報告の公告が規定され，江戸時代には秘匿があたりまえだった財政状態に関する情報を新聞に掲載することが義務付けられた。

### 経営の公共性への意識啓発

株式会社組織の採用，近代会計制度の導入により，それまでは私的なものであった経営は，公共性を伴うものであることを経営者自身，またそれを取り巻く社会にも伝播させたのである。

\*国立銀行は，国が設立したのではなく，民間資本の銀行。“国の法律に従って設立された”という意味。



## 〔報告4〕北海道アイヌの近代化と文明開化

北海道教育大学札幌校 百 瀬 響

### アイヌ文化の形成と近代以前の状況

北海道アイヌは、明治以前には主に河川の沿岸や海岸部に居住し、漁業および狩猟採集を生業とした人々である。アイヌ文化の原型は、本州の弥生・古墳時代文化の影響を受けた「縄文文化」、「擦文文化」（土器・鉄器使用）と大陸の影響下にある「オホーツク文化」（石器・鉄器使用）の混雑した結果、13～14世紀に形成された。この頃、近隣集団との交易において、アイヌは鉄器や衣服（糸・布を含む）・装飾品（漆器等）を日本・大陸から輸入し、鮭をはじめとする豊富な海産物や、毛皮・鷹の羽（武具に必須とされた）等を輸出していた。

江戸時代には、北海道は松前藩の領地となったが、松前藩の経営は（寒冷地で米が収穫できないため）、漁業の収穫物や木材、アイヌとの交易品を本州で米と交換する、特殊な形態をとっていた。近世のアイヌ社会において、交易や漁場での労働収入で得る物品（米・酒・煙草・木綿・糸・鉄器・漆器等）は重要度が増し、日常生活のみならず、儀礼やアイヌ間での交換・賠償品として不可欠な物となる。その間、松前藩での交易や漁業経営の主体が、藩から商人（の漁場請負）へと移行したことは、アイヌの立場を弱体化し、和人の収奪を激化させる要因となった。

### 文明開化とアイヌに対する文化・生業制限

明治維新を経て、北海道に「開拓使」（1869～1884年）が設置され、「北海道開拓」が開始された。当初、寒冷な気候のため本州からの移民の定着は遅れたが、和人（アイヌ以外の日本人）の増加により、次第にアイヌは少数者となっていく。またそれと同時に、アイヌは日本国民として「同様」の生活を送ることが求められるようになった。北海道アイヌに対する施策にも、当時の国是であった「文明開化」が関係している事例が多くみられる。例えば、明治9（1877）年に施行された「北海道鹿猟規則」において、北海道アイヌは弓矢猟を禁止され、鉄砲による猟のみを行うことが定められた。従来、この法律制定の目的は鹿の乱獲を防ぐこととされているが、実際には、当時のお雇い外国人H.ケブロン（米国農務省長官から開拓使顧問に就任）が、弓矢猟を「残酷の習い」と評価したことに起因する。この評価を受け、開拓使長官黒田清隆が「汚習（悪い風習）」として、直接官吏に禁止するよう命じたのである。

この「汚習」という語は、「陋習」などと共に、当時の日本国内で和人・アイヌ双方の文化に対してよく使われていた言葉である。これらは、近代初の軽犯罪法とされる違式誹違条例によって取り締まられたが、中でも入れ墨や往来での裸・立小便、混浴などは、「文明国にあるまじき」「野蛮の俗」として規制された。北海道でも同条例が施行されたが、それとは別に、アイヌに対して女性の文身（いれずみ）などが繰り返し禁止された。全国で規制の対象となった風俗と、北海道でなされたアイヌ女性の文身などの習俗禁止の事例を比較し、これらの行為が国内で禁止された経過について、当時の外国人・日本人・アイヌそれぞれの評価や判断の内容を紹介通し、近代化の過程で日本および北海道アイヌ文化がどのように変化したか／変化せざるをえなかったか、その理由を検討した。特に外国人の日本文化批判を意識して、「批判されると困るから」と自らの文化を規制し、それをアイヌ文化にも適用するあり方は、日本の近代化の特徴として、かつその後の植民地での文化政策のひな型となったともみなしうであろう。



## 〔報告5〕琉球処分と沖縄の民俗

沖縄国際大学非常勤講師 宮 平 盛 晃

### はじめに

1372年、琉球の中山王察度が中国皇帝から琉球国中山王という称号を与えられた以降、琉球と中国は互いに使節団を派遣し、盛んに交易を行なってきた。

1609年、琉球は薩摩の侵攻により、薩摩藩の支配下に置かれた後も、日本本土の風俗習慣を模倣することは禁止され、形の上では琉球は王国の体裁を保ち、中国への冊封を継続してきた。

中国と始めた冊封貿易により約500年続いてきた琉球王国の終焉と、沖縄県として日本国内に統合される時代、それが沖縄における近代の始まりであった。

### 沖縄における近代

全国的に廃藩置県が実施された1871年（明治4）、琉球は一旦、鹿児島県の管轄下におかれ、翌年に明治政府は、琉球王国を琉球藩、尚泰王を琉球藩王に任命することを告げる。

そして、明治政府は、宮古島島民遭難事件（1871年）を機とした台湾への出兵を経て、1875年、琉球藩に対して、王国制度の解体、中国との関係の断絶、日本に属する沖縄県とすることを通達する。

1879年（明治12）3月末、明治政府は説得が困難と判断し、尚泰王の逮捕をとまなう武力行使による、琉球藩の廃止と沖縄県の設置を断行した。いわゆる「琉球処分」である。形式的とはいえ、500年近く続いた琉球王国は無くなり、沖縄県となった。

### 旧慣温存政策と民俗

琉球処分後、明治政府は、急激な改革による特に士族層の反発を防ぐため、王国以来の土地制度、租税制度、地方制度、慣習を根本的には変えないという旧慣温存政策を敷いた。

1894年（明治27）の日清戦争での日本の勝利によって、県民感情の上でも親清派が減少してきたのを機に、日本政府は、旧慣温存政策を見直し、本土と同じ制度を適用することを目指し始める。

その一つは、1899年から1903年にかけて行われた土地整理事業である。王府時代からの土地を共有して割り替える地割制を廃止し、共同体の中で農民が使用していた土地を私有地として認め、所有者を納税者とした。また、17世紀から先島諸島で行われていた人頭税が1903年（明治36）に廃止された。徴兵制、地租改正、租税制度など、本土の施行からおおよそ10～25年遅れたことになるが、人頭税廃止をもって沖縄の旧慣温存政策は終了した。

以上、沖縄における近代は、旧慣温存策により他府県に比べ緩やかではあったにせよ、王国としての歴史、沖縄内部での変化、日中間での帰属問題、諸制度の日本化など、琉球（沖縄）という長い歴史から見れば転換期となる時代であった。さらに、屋取の発生、暦制改革、御嶽再編、婦人の入墨、土地制度など、沖縄の民俗にも様々な影響を与えた。

## 〔報告6〕中国の近代化

国士舘大学21世紀アジア学部 小 島 末 夫

まず、日中両国における“近代”の時代区分に関して述べると、次のようになる。

日本：明治維新（1868年）～終戦（1945年）

中国：アヘン戦争（1840～42年）～五四運動（1919年）或は中華人民共和国成立（1949年）  
アロー戦争（1856～60年）

つまり、日中両国では、ほぼ同じ時期に近代化（西洋化）が開始された。しかし、その後は両国間の較差が開き、中国の立ち遅れが目立つようになった。その背景として、中国には独自の伝統文化があった点が却って災いした事が挙げられる。

### ＜中国の近代化：旧体制の変革＞

19世紀の中国を開国させ、変化させていったのは、主として欧米諸国の武力、経済力など圧倒的な「西洋の衝撃」によるものであった。中国の近代化に真に“能動的”な役割を果たしたのは外的要因としての西洋であり、中国が演じた役割はあくまで“受動的”なものに過ぎなかった。そうした旧体制下での変革の動きについて、清朝末期の2つの近代化運動を取り上げる。

第1は、曾国藩・李鴻章などが主導した洋務運動（1860年以降）である。

これは、中国の学問や思想こそが本体とする「中体西用」の考え方が中心で、西洋の技術や物質文明を接ぎ木するというものであった。

第2は、康有為・梁啓超などが主導した、俗に「百日維新」とも呼ばれる変法運動（1895年以降）である。

これは、急進的な政治改革や富国強兵策を目指したものの、抵抗勢力により遭えなく挫折した。日本の明治維新をモデルとしていた。

ただ、いずれも漢人官僚が推進した上からの近代化政策であり、自ずと限界があった。

### ＜和製漢語の中国への伝播＞

中国の近代化に一定程度、日本も貢献した。それは、中国語の科学技術用語のかなりの部分が元々日本語であったことから窺われる。つまり、和製漢語：西洋語→日本語→漢字に訳された外来語として中国に伝播。例えば、中国の正式呼称である「中華人民共和国」のうち、“中華”を除く人民も共和国も共に和製漢語である。その橋渡しの役を負ったのが、日清戦争（1894～95年）後の20年間に合計10万人も日本に派遣された留学生たちである。

### ＜中国における近代工業の発展＞

現下の中国経済の高成長に資する基盤の形成として忘れてならないのが、19世紀半ばに勃興した近代工業である。当初は日本の明治時代と比べてみても遜色の無いことが分かる。

鉄道：1876年 上海～呉淞間（14.5km）、1878年 唐山～胥各庄間（9.7km）

日本→1872（明治5）年 新橋〔現汐留〕～横浜〔現桜木町〕間（29.0km）

鉄鋼：1894年 漢陽製鉄所～当時、東アジア最先端の設備

日本→1901（明治34）年 官営八幡製鉄所

## 〔報告7〕朝鮮半島の日本語

国士舘大学21世紀アジア学部 河 先 俊 子

韓国語と日本語の中に、同一の漢字語が数多く含まれていることは、広く知られている。これは、開化期、植民地支配期における言語接触の結果、相当数の日本語の語彙、表現が韓国語の中に取り込まれたからである。それらは言語学上、①発音を通じた直接借用（無鉄砲、爪切りなど）、②漢字を通じた間接借用（赤字、勝負など）、③日本語の慣用句を韓国語訳した翻訳借用、④造語法の借用の4つに分類されている<sup>1</sup>。

植民地支配期には大量の日本語が流入し、解放直後は通りを歩く人の会話からも日本語が聞こえてくるほどであったという。このような日本語の浸透に対して、解放直後、朝鮮語学会（1949年ハングル学会と改称）による日本語排除運動が展開された。これは激しい言語ナショナリズムを帯びた運動であったが、真っ先に排除の対象となったのは、発音を通じた直接借用であり、漢字を通じた間接借用の語彙のほとんどは、排除対象から外された。多くの和製漢語が、韓国の人々の言語生活、思考を支えており、排除できなかったと推測できる。

日本語排除の運動は、その後も韓国政府によって継続的に行われていることが新聞記事から確認できる。また、放送業界における日本語使用に対しては、市民からも批判の声が上がっていた。

このように日本語は、その存在自体に否定的な視線が向けられてきたため、いつ、どのような日本語が受容され、どのように定着したのかに関する研究が行われにくい状況が続いていた。しかし、日本語の漢字語が開化期に朝鮮社会の近代化をめざした知識人によって主体的に導入されたのは事実であり、近年、日本語と韓国語との言語接触の研究も行われるようになった。例えば、1881年、紳士遊覧団の随員として訪日し、慶應義塾に進学した兪吉濬は、著書『西遊見聞』において、会社、技術、共和、裁判、資本、大統領、約束、立憲など290語の日本語の漢字語を使用している<sup>2</sup>。また、1904年、皇室特派留学生として派遣された崔南善は、その著作の中で、意志、関係、形式、需要、自由、進化、主義、民権、民族など144語の日本語の漢字語を使用している<sup>3</sup>。

このように見てくると、彼らが導入した漢字語彙の中には、言語生活上、重要なだけではなく、近代的な思考を支え、近代国民国家及び国際関係を根底において規定したような語彙も多く含まれていることが分かる。しかし、同じ漢字で表現されていても、日本社会と朝鮮社会においてそれが表す意味内容が同一であったとは限らない。例えば、兪吉濬は、「万国公法」を儒教的普遍主義に基づく相互主義と道徳主義の観点から解釈しており、福沢の解釈とは異なっている<sup>4</sup>。このように、一見同じ外見をまといながらも、その意味内容が異なることは、両者の対話や相互理解を妨げる一因となっていると考えられる。

従って、言語接触の研究において、概念史研究の視点を取り入れ、意味用法の変容を丁寧に見ていく研究が重要であると考えられる。本発表では、具体例を示しながらそのような研究の重要性を指摘した。

1 熊谷明泰「朝鮮ナショナリズムと日本語」田中克彦・山脇直司・糟谷啓介編『ライブラリ相関社会科学 言語・国家、そして権力』新世社、1997年、171-172ページ。

2 李漢燮「『西遊見聞』の漢字語について－日本から入った語を中心に－」『国語学』141、39-50ページ。

3 白南徳「20世紀初頭における在日韓国人留学生の日本語の受容－文学者崔南善の場合－」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第2部54号、2005年、221-230ページ。

4 金鳳珍「東アジア近代知識人の万国公法観の形成と変化」『近代日本における国際関係用語の文化触変－韓国との比較－』研究成果報告書（2000-2001年度文部科学省科研費研究、基盤研究C、研究者代表：平野健一郎、課題番号：12620098）2002年、9-44ページ。

## 〔報告8〕台湾原住民と日本 ——「旧慣」の近代化とその影響

山 田 仁 史

1895年に台湾を領有して以来、1945年の終戦に至る半世紀間、日本は台湾において多方面にわたる近代化政策を推進した。台湾に住んでいた人々のうち、とりわけ原住民（オーストロネシア系先住民）たちは、日本人とは著しく異なる諸慣習を有していたため、それらの調査と対策が急務となった。

台湾における日本統治期の政策については、3期ないし5期に区分する見方があるが、いずれにせよ、初期の漸進的同化政策から次第に積極的同化政策（内地延長主義）に転じ、さらには急進的同化政策（皇民化）へと進んでいった。

初期にはまず彼らの「旧慣」調査が開始されたが、そもそも首狩の習俗を持つ彼らの居住地へ入ることすら当初は困難をきわめ、各地で武力衝突が相継いだ。やがて総督府は、さまざまな根拠と施策のもとづき、これら「旧慣」の近代化に邁進してゆく。

たとえば、農耕儀礼などと結びついて行われていた首狩に関しては、清代に自己犠牲により首狩を止めさせたとされる呉鳳という人物の物語を流布させ、教科書にも掲載するなどにより、次第に撤廃へ追い込んでいった。1938年（昭和3）に台湾を訪れた社会学者の河村只雄によれば、「昭和の高砂族の青年等は、又首棚を見られることを古疵に触られるが如くに嫌がるといふので」、こっそり見に行かねばならぬほど意識変革も進んでいた（『南方文化の探究』）。

また、成人儀礼の一部であった入墨や、死者を屋内に葬る屋内葬などについては、衛生観念を強調することで禁止し、「改良蕃屋」と呼ばれる新たなタイプの家屋建造を推進させる。さらには、山地から低地への移住を推し進め、それまでの焼畑農耕に代えて水稻耕作を奨励していった。農耕サイクルの中で行われていた祭儀も簡略化・合理化させた。

こうした施策により、原住民の諸社会はそれまでの社会・文化的基盤を大きく変容させざるを得なくなった。他方で、「日本精神」にもとづき、太平洋戦争においては多くの原住民青年たちが、「高砂義勇隊」として南洋の戦地へ志願して出征した。

戦後になり、原住民社会ではある種の精神的空隙が生じたとされ、それがキリスト教が急速に広まった一因とも指摘されている。他方で、貨幣経済の大きなうねりに巻き込まれていく中で、原住民たちは遠洋漁業などの出稼ぎに出たり、都市での酷烈な労働（肉体労働・売春）に従事せざるを得ない状況に置かれ、集落ではアルコール中毒も蔓延した。80年代からの原住民権利回復運動、90年代後半からの台湾政府の政策により、現状は改善しつつあり、原住民としての尊厳も取り戻されつつある。

〔参考文献〕 呉昱瑩『日本統治時代から戦後初期における台湾原住民の「改良蕃屋」に関する研究』京都府立大学大学院博士論文（2012）；笠原政治「屋内埋葬：日本統治期における台湾原住民の旧慣消滅をめぐる」森口恒一（編）*Batanes Islands and Taiwan: Essays in Honor of Prof. YAMADA, Yukihiro on His Seventieth Birthday*（2005）；渡邊昌史『身体に託された記憶』明和出版（2012）；山田仁史「台湾原住民における首狩」『アジア民族文化研究』7（2008）；山田仁史「台湾原住民における焼畑」佐藤洋一郎（監修）原田信男／鞍田崇（編）『焼畑の環境学：いま焼畑とは』思文閣出版（2011）；山本芳美『イレズミの世界』河出書房新社（2005）